

明治鍼灸大学附属鍼灸センターの実態報告 (第1報)

*明治鍼灸大学 東洋医学教室

田和 宗徳*	矢野 忠	佐々木和郎	松本 勅
北出 利勝	尾崎 昭弘	篠原 昭二	廖 登稔
中村 満	池内 隆治	北小路博司	芳野 温
山田 伸之	片山 憲史	石丸 圭荘	大山 良樹
清藤 昌平	寺沢 宗典	中西 宏元	廣 正基
渡辺 一平	石崎 直人	越智 秀樹	山川 緑
渡部 勝久	和辻 直	江川 雅人	木下 肇
行待 寿紀			

Reoprt of Actual State on Meiji College
of Oriental Medicine Acupuncture Center (I)

TAWA Munenori*, YANO Tadashi, SASAKI Kazurou,
MATSUMOTO Tadasu, KITADE Toshikatsu, OZAKI Akihiro,
SHINOHARA Syoji, LIAO Ten jen, NAKAMURA Mitsuru,
IKEUCHI Takaharu, KITAKOUJI Hiroshi, YOSHINO Sunao,
YAMADA Nobuyuki, KATAYAMA Kenji, ISHIMARU Keisou,
OHYAMA Yoshiki, KIYOFUJI Shohei, TERASAWA Syuten,
NAKANISHI Hiromoto, HIRO Masaki, WATANABE Ippei,
ISHIZAKI Naoto, OCHI Hideki, YAMAKAWA Midori,
WATANABE Katsuhisa, WATSUJI Tadashi, EGAWA Masato,
KINOSHITA Hajime and YUKIMACHI Toshinori

*Department of Oriental Medicine, Meiji College of Oriental Medicine

Key Words : 鍼灸 Acupuncture and Moxbustion, 医療統計 Medicine statistics,
鍼灸センター Oriental medicine acupuncture center,
実態調査 Reoprt of actual condition

I はじめに

昭和58年、明治鍼灸大学は、現代医学と鍼灸医学の有機的な関連をもった教育を行なうことにより、豊かな医学知識と高い教養を身につけた指導的な人材を育成することを目的に設立された。その後、鍼灸治療の適応と禁忌を明らかにするために附属病院を昭和62年に開設した。さらに平成元年4月には附属鍼灸センターを病院に隣接させることにより、設立目的にそぐべく両者の有機的な連携がはかられた。

現在、附属鍼灸センターは附属病院と密接な連携を図り、鍼灸治療の適応と禁忌ならびに鍼灸治療の効果についての検索を行なっているが、その研究の一環として附属鍼灸センターの患者の動態の分析を行なっている。

そこで、今回我々は平成元年度の附属鍼灸センターの患者の動態について報告するとともに、附属鍼灸センターの機構と機能ならびに附属病院との連携形態についてあわせて紹介する。

II 附属鍼灸センターの機構・機能

附属鍼灸センターは主に東洋医学教室の教員がスタッフとなり運営されている。東洋医学教室は附属鍼灸センターの外来診療を担当するとともに、附属病院各科にスタッフを送り各科外来及び入院患者の鍼灸治療を行ない、鍼灸治療の適応や限界を明らかにするための臨床研究を進めている。

附属鍼灸センターは、臨床、教育、研究および東西医学の融合の4つの機能を有している。すなわち、第1は鍼灸の外来診療の場としての機能であり、第2は3年次、ならびに4年次の学生の臨床実習の場としての機能である。附属鍼灸センターにおける臨床実習は3年次後期から4年次前期にかけての1年間行なわれ、診察から治療に至る基本的な臨床診断能力の修得を目的としている。ベッドサイドでの臨床実習はこの他4年次の学外の附属研修所実習、及び附属病院各科での実習において行なわれている。また、鍼灸センターは、3、4年次の学生のほか研修鍼灸師、研究生、鍼灸教員養成施設学生の臨床教育も行なっている。第3

の機能は、臨床研究グループの編成により疾患あるいは症状別に臨床データを集積している。なお、鍼灸センターの患者は附属病院で確定診断を得ることを原則としている。

第4の機能は東西医学の融合の場としての機能であり、附属病院と提携し同一患者を東西医学の両面から診ることにより、現代医療における鍼灸のより良いあり方の検討を進めている。

III 附属鍼灸センターと病院との関係

附属鍼灸センターと附属病院は密接な関係を有しており、鍼灸センターから附属病院に対して、疾患の確定診断、鍼灸治療の効果判定の依頼および患者の紹介等を行なう。附属病院の各科から鍼灸センターに対して、鍼灸治療が適すると考えられる患者の紹介が行なわれている。治療は鍼灸単独治療あるいは西洋医学的治療との併用が行なわれている。鍼灸治療は病院内でも各科ごとに疾患を限定して行なわれており、また必要があれば入院患者に対しても行なわれている。鍼灸センターでの治療は10回を1クールとし、1クール終了後に紹介科に患者を送り鍼灸治療の効果判定を受けるシステムをとっている。

また、附属鍼灸センターでの診療において病態の不明なもの、あるいは鍼灸治療の不適と思われる患者は適宜附属病院に紹介し、詳細な診察を受けることになっている。

IV 附属鍼灸センターの治療方針

附属鍼灸センターの基本的な方針は、現代医学的手法による診察と東洋医学的な診察によって東西医学の両面から病態を明らかにし、その上で治療方針を決めることを原則としている。治療方針の決定は、まず八綱弁証による弁証を行ない、経筋病、外感病、内傷病に分類する。経筋病に属する患者については現代医学的な病態把握にもとづき局所あるいは周辺に治療点を求めたり、あるいは関連経絡上(循経取穴など)に治療を行なう。

一方、内傷病や外感病に属する患者については臓腑、気血、経絡などの弁証法を用いて最終的な

証を決め、その上で東洋医学的治療方針を決定する。(表1参照)

V 平成元年度附属鍼灸センターの患者動態

1. 調査方法と対象

対象は、平成元年4月1日～平成2年3月31日までに来院した新患々者及び再来患者を対象とし、平成元年度に来院した新患々者について来院した月別動態、性別、年齢、主訴、病名、病院各科からの紹介の状況、病院各科への紹介の状況および患者の地理分布別をコンピューターに入力し、集計した。また、平成元年度の月別総患者数においてもあわせて調査した。

2. 結果

1) 月別患者数

図1は平成元年度の来院患者を月別に分けたものである。年間の患者数は合計7508名であり、最高は平成2年3月の853名、最低は平成元年4月の458名で、月別平均では626名であった。患者数の動態を見ると4月には458名の来院患者であったが、6月以降600名以上に増加した。平成2年1月には507名にいったん減少したが、3月には再び852名と大きく増加した。

4月～5月ならびに1月に患者数が少なかった理由としては、4月から5月は附属病院からの紹介患者が少なかったことと農繁期にあたったことが考えられ、1月は当鍼灸センターの所在地の冬の気候(積雪)による影響ではないかと思われる。

2) 月別新患々者数

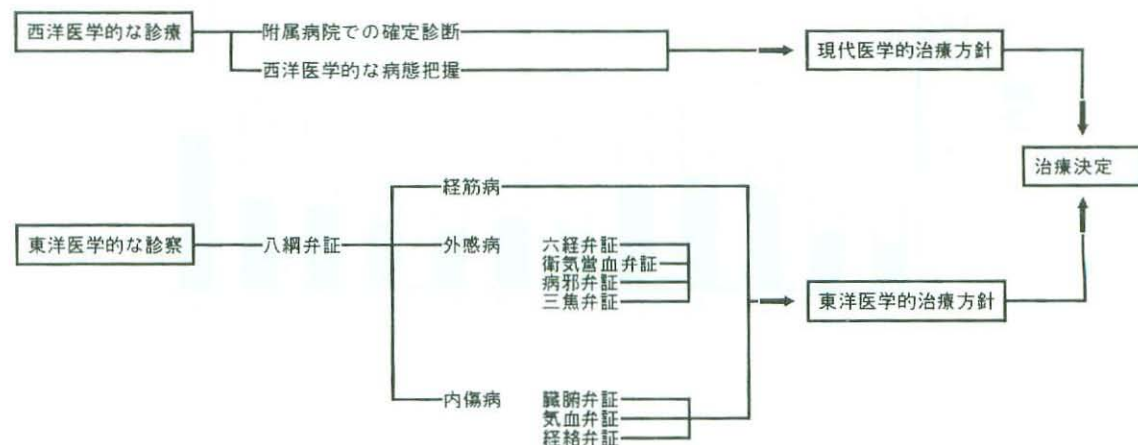
図2は平成元年度の月別の新患々者数を男女別に分けたものである。年間の合計は778名であり、最高は平成2年3月の121名、最低は平成元年5月の37名、月別平均は約65名であった。4月から5月と9月から11月の新患々者の減少の理由は、大学所在地の周辺が農村地帯で兼業農家が多く、同時期が農繁期であったために患者数が減少したものであると思われる。また、年間の新患々者数の男女比はほぼ同じであった。

3) 地域別患者数

図3は京都府の地図上で本学所在地を中心に患者の地理分布を表したものである。大学所在地(日吉町101名)と周辺の市町(園部町114名、丹波町75名、八木町64名、亀岡市61名、和吹町60名、京北町40名、美山町39名)からの来院患者が全体の約68%を占め、京都府全体では91%であった。

表1 明治鍼灸大学附属病灸センターの方針

附属鍼灸センターでの基本的な方針は、現代医学的手法による診察と東洋医学的診察によって東西医学の両面から病態を明らかにする。



また兵庫、大阪、滋賀、奈良などの近畿一円の遠距離からの来院患者も9%みられた。以上のことから鍼灸センターの来院患者は遠隔地よりも近隣からの来院が大多数を占めるという地域密着型であることがわかった。

4) 年齢別患者数

図4は新患々者を年代ごとに分けた年齢別患者数を示したものである。平成元年度は40才、50才代の熟年期がそれぞれ113名、183名で、60代、70代の老年期がそれぞれ214名、143名となり、この

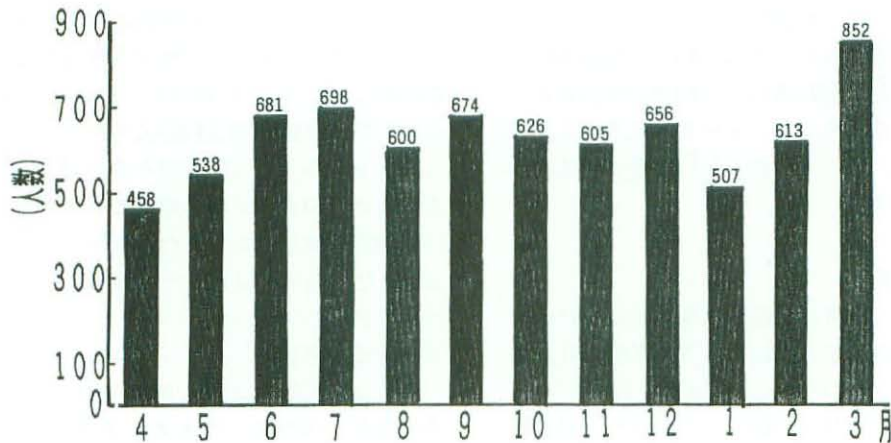


図1 平成元年度月別総患者数

平成元年度の総患者数を、来院した月別に分けたもので、年間の合計は7508名、月別平均では、626名であった。

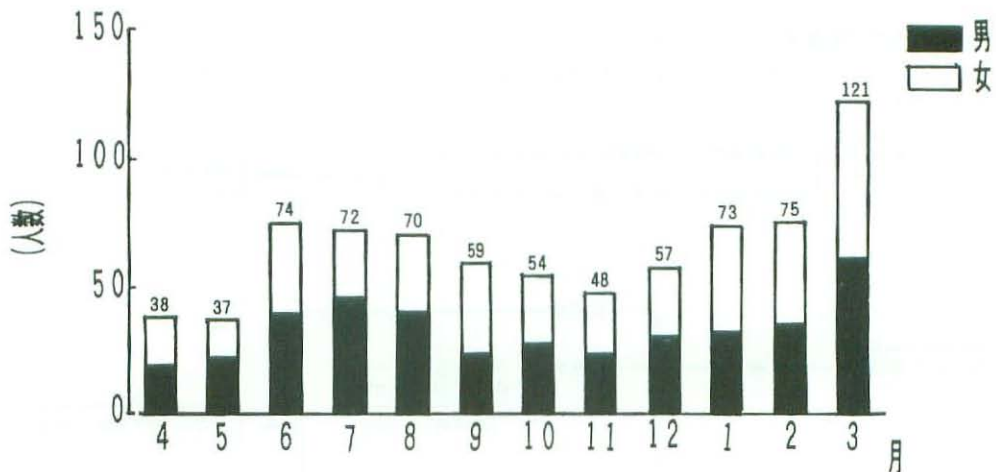


図2 平成元年度月別新患々者数

平成元年度の新患々者数を月別に分けたもので、年間の合計は778名、月別平均では、約65名であった。



図3 平成元年度新患々者地域別患者数

平成元年度の新患々者の住所地の合計を京都府を中心に表したもので、周辺市町が全体の65%で京都府全体では91%であった。

年代の患者が全体の84%を占めた。10～30代の患者は全体の14%前後に留まっており、鍼灸治療患者は比較的高齢者が多く、高齢者の鍼灸治療に対

する関心の強さを窺わせる結果となった。

5) 職業別患者数

図5は新患々者の職業別分布である。本学が農

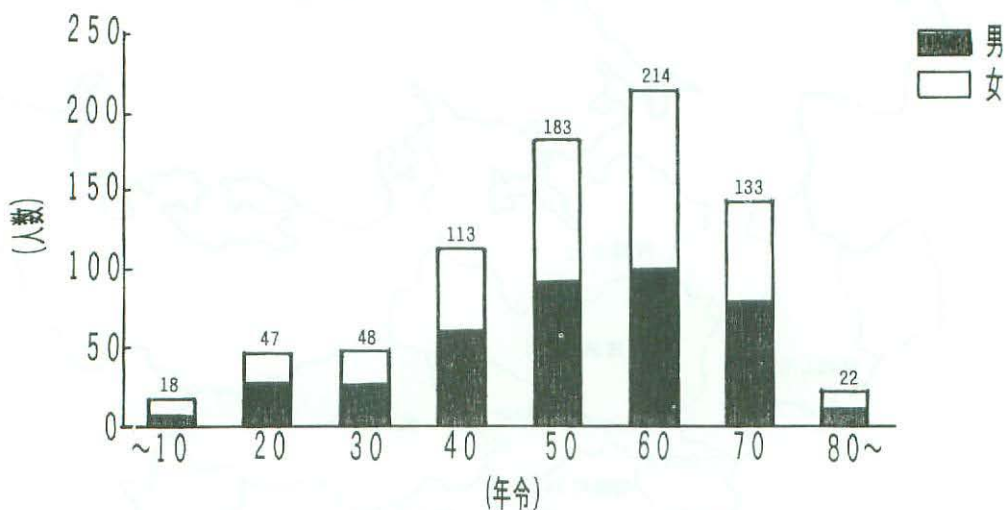


図4 平成元年度新患々者年齢別患者数

平成元年度の新患々者数を年齢別に分けたもので、熟年期と老年期を合わせると84%の来院患者があった。

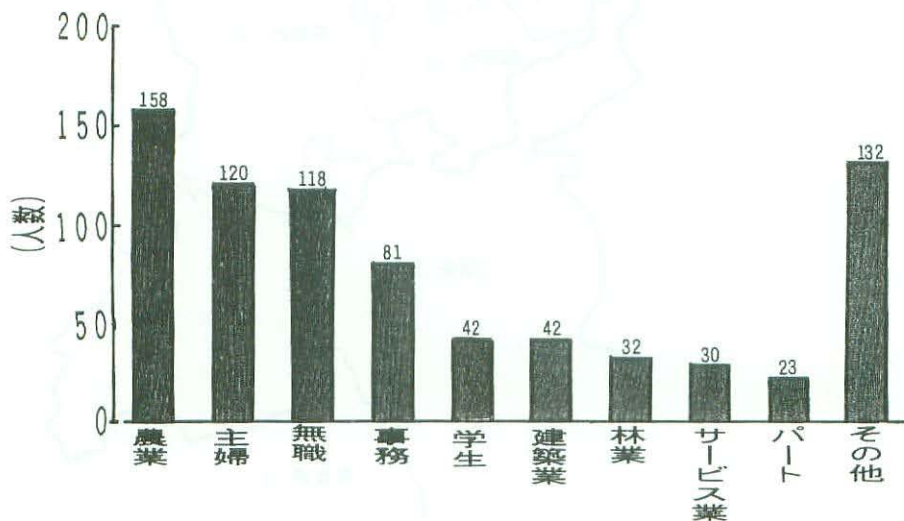


図5 平成元年度新患々者職業別患者数

平成元年度の新患々者の上位10の職業を示したもので、全体では肉体労働を主とする患者が多く見られた。

村地帯に所在している関係で、農業が20%と最も多く、つづいて主婦(15.4%)、無職(15.2%)、事務職(10.4%)の順で多かった。全体では肉体

労働を主とする患者が多かった。また、その他の職業の中には、教員、公務員、医療関係者、僧侶、電気・通信、酪農等の広範な職業従事者が含まれ

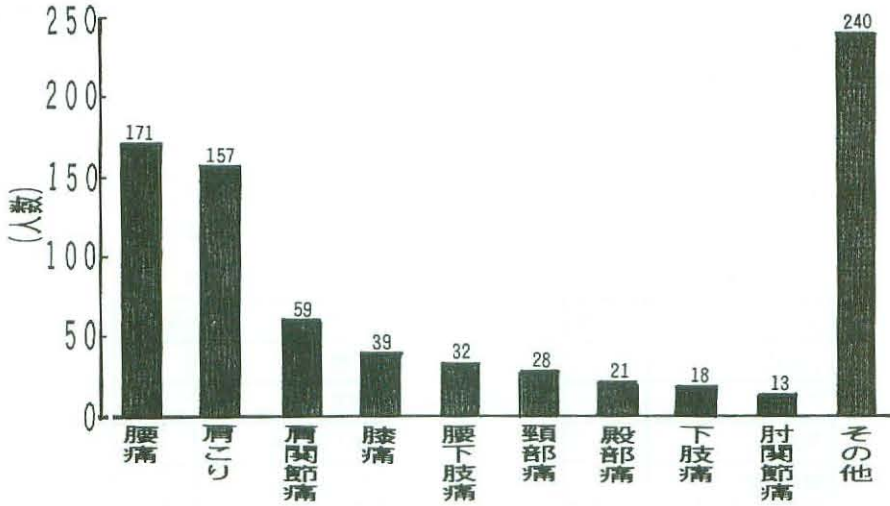


図6 平成元年度新患々者主訴別患者数

平成元年度の新患々者の上位10の主訴を示したもので、全体では痛みを伴った主訴が多く見られた。

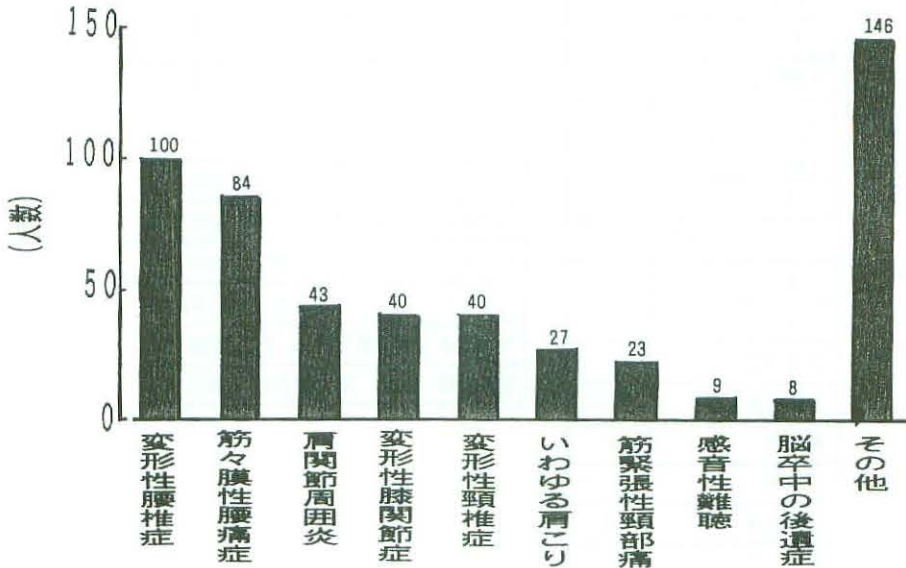


図7 平成元年度新患々者疾患別患者数

平成元年度の新患々者数の上位10の主訴を示したもので、全体では骨、軟部組織の疾患が多く見られた。

ていた。

6) 主訴別出現頻度

図6は新患々者の主訴の出現頻度を表したものである。腰痛、肩こり、肩関節痛、腰下肢痛の順で主訴の出現頻度が高く、上位10位までを全て痛みを主とする運動器疾患が占めた。このように、運動器疾患が多いことは、運動器疾患に対して鍼

灸治療が適応することを示唆するものと考えられる。また、その他の主訴には表2に示す通り、整形外科系の痛みやしびれの他に頭痛、不眠、全身倦怠、耳鳴り、頻尿、上腹部痛があり、さらには1症例ではあるが言語障害、陰部痛、眼出血、排尿障害もみられた。

7) 疾患別出現頻度

表2 その他の主訴

平成元年度の新患々者の主訴の中で小数例をまとめたものである。

整形外科系		その他	
主訴名	症例数	主訴名	症例数
上肢痛	9	耳鳴り	11
下肢痛	9	頻尿	6
背部痛	9	喉の違和感	5
腰臀部痛	8	目の違和感	5
手関節痛	6	顔麻痺	3
手のしびれ	5	鼻閉	2
下腿部痛	5	難聴	2
足関節痛	5	夜尿	2
上腕部痛	4	近視	2
大腿部痛	4	生理不順	2
足のしびれ	3		
上肢のしびれ	3		
上肢のだるさ	2		

内科系	
主訴名	症例数
頭痛	11
不眠	7
全身倦怠	7
上腹部痛	6
胸部痛	5
片麻痺	5
心下部痛	4
湿疹	3
胃のもたれ	2
便秘	2

1 症例のなかの特異的な主訴	
手の指の痛み	手足の冷え 頭部のほてり
言語障害	痲保 顔のかゆみ 陰部痛
目のチック	眼出血 複視 息切れ
イライラ	目眩 マブタの下垂 下痢
排尿障害	会陰部不快感 視力障害
側胸部痛	喘息 胸部違和感 顔面部痛

図7は疾患別の出現頻度を示したものである。変形性腰椎症(19%)、筋々膜性腰痛(16%)、肩関節周囲炎(8%)、変形性膝関節症(8%)といった骨、軟部組織の疾患が多く、表3に示す整形外科系のその他の疾患もあわせると整形外

科に属する疾患は82%を占め、主訴同様に運動器疾患の鍼灸の適応が多いことを窺わせた。

しかしながら、表3に示すように運動器疾患以外のその他の疾患も多く、多様な疾患に対して鍼灸治療が行なわれたことを示している。特に本鍼

表3 その他の主訴

平成元年度の新患者の疾患の中で小数例をまとめたものである。

整形外科系		内科系	
疾患名	疾患数	疾患名	疾患数
腰部神経根症	16	脳卒中の後遺症	4
頸部神経根症	11	胃炎	3
腰部椎間板ヘルニア	8	胃潰瘍	2
RA	7	ヘルペス	2
腰椎椎間板症	6	アトピー性皮膚炎	2
外側上顆炎	5	高血圧	2
腰椎スベリ症	5	不眠症	2
頸肩腕症候群	4	気管支喘息	2
骨粗鬆症	4	脳動脈硬化	2
頸椎椎間板症	3	SMON	2
腰部捻挫	3		
上腕二頭筋長頭腱炎	3		
腰部脊柱管狭窄	3		
頸部捻挫	2		
手根管症候群	2		
振動症候群	2		
内側上顆炎	2		
変形性股関節症	2		
肋間神経痛	2		

その他の病名

疾患名	疾患数
感音性難聴	5
喉頭異常感症	4
顔面神経麻痺	4
胃癌術後愁訴	3
神経因性膀胱	3
前立腺炎	3
夜尿症	3
近視	2

1症例に見る特異的な疾患

ジャンパー膝	狭窄性腱鞘炎	頸椎Op後	頸椎圧迫骨折	頸椎後縦靭帯骨化症
頸椎損傷	頸関節症	大腿骨頸部骨折後の痛み	多発性硬化症	馬尾症候群
梨状筋症候群	肝機能障害	ヘルペス脳炎	甲状腺機能亢進症	上室性頻脈
サルコイドーシス	陳旧性心筋梗塞	肺気腫	糖尿病性神経炎	連合弁膜症
滑車神経麻痺	遊走腎	乳癌切除後の上肢浮腫	肺癌による痛み	
高安病	角膜ヘルペス	眼球結膜出血		

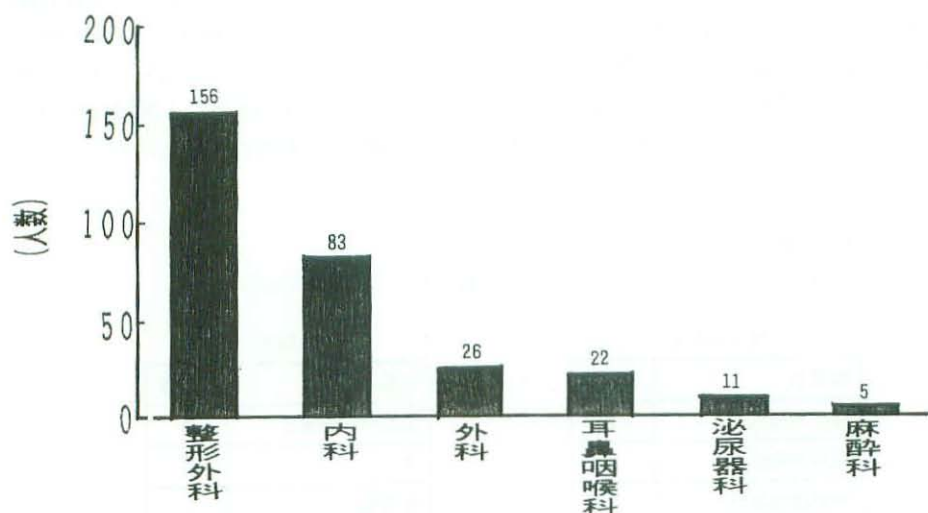


図8 平成元年度新患々者紹介患者数

平成元年度の新患々者の疾患の中で病院により紹介を受けた患者を各科ごとに分けたもので、治療対象は整形外科、麻酔科は主に疼痛であったが、その他は当該疾患の主症状および疾患に随伴した不定愁訴であった。

灸センターは病院に隣接している関係で喉頭異常感症、胃癌術後愁訴、神経因性膀胱、多発性硬化症、陳旧性心筋梗塞、連合弁膜症等の疾患の主症状や疾患に随伴して出現した不定愁訴に対しても鍼灸治療が行なわれており、今後臨床データの集積により効果が確認されれば鍼灸治療の適応の拡大が期待できるものと考えられる。

8) 紹介患者数

図8は病院からの紹介患者を表したものである。整形外科からの紹介患者が一番多く(20%)、ついで内科(11%)、外科(3%)の順である。なお平成元年度の新患々者の内39%が病院からの紹介患者であった。それらの紹介患者の治療対象は、整形外科・麻酔科は主に疼痛であったが、内科、外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科からの紹介患者の治療対象は、当該疾患の主症状および疾患に随伴した不定愁訴であった。

VI 考 察

本鍼灸センターは、平成元年に附属病院に隣接

して設置され、附属病院と有機的な関係を維持しながら鍼灸治療の適応と限界について検討を進めている。その研究の一環として今回我々は平成元年度の来院患者の動態を分析することにした。

平成元年度の総患者数は7508名、新患々者は778名であり、1日当たり約31名であった。また、新患々者を所在地別で見ると大学近隣の市町よりの来院が全体の68%を占める結果となったが、これは来院患者の60%以上が治療所の30km以内の患者であったと報告している森山¹⁾らの東京における割合より多く、このことは本学附属鍼灸センターが山間部に所在している立地条件のために施設の所在する地域により密接した形で成り立っていることを示している。

次に患者を年齢別に見ると、熟年～老年期が全体の84%を占めた。特に60～70才代の老年期の患者が新患々者の46%を占めており、鍼灸治療の主たる治療対象が中・高年の労働人口であるとの西條²⁾の報告とは若干異なる結果となった。これは、大学周辺は農村地域であり、人口の高齢者の割合

が都心に比べて多いという地域性の相違にもとづくものと考えられる。今後は、老年期以外の若年層に対する鍼灸の啓蒙の必要性があると考えられる。

次に主訴、病名では痛みを主訴とした骨・軟部組織の障害すなわち運動器系の患者が上位に見られる。上山³⁾らの報告によると昭和59年の国民健康調査において鍼灸治療の中で一番の適応症としてあげられる腰痛でさえも鍼灸治療を受けなかった患者が全体の80%に見られたとしている。この傾向が現在においても続いているとするならば、今後これらの痛みで悩む患者の鍼灸への理解を深めさせるような、より一層の努力が各臨床施設に求められる。

また、鍼灸治療は運動器系疾患以外の主訴、疾病に対しても行なわれているが、特に本鍼灸センターでは附属病院との連携により多種の疾患や主訴が鍼灸治療の対象となっている。これらの疾患に対する治療目的は疾患の主症状や疾患に伴って起こった不定愁訴に対するものであり、これを通して各科疾患の鍼灸治療の適応を明らかにすることを検討している。このことは、本学の設立目的の1つであり、今後各疾患における症例を増やし、鍼灸治療の適応と限界を明らかにしてゆく方針である。

また、鍼灸治療の適応の拡大をはかる動きが平成元年の厚生白書⁴⁾に見られており、「シルバーサイエンス研究事業」の中で東洋医学の特性（生体の生理的恒常性の維持、回復を一義的に考える治療体系）を生かして高齢者に適した医療を確立するという目的で鍼灸、漢方薬の研究が一項目にあげられている。将来の鍼灸治療分野の拡大に向けて明るい材料になるものと期待したい。

文 献

- 1) 森山 朝正ら：鍼灸臨床レポート(4)、当センター臨床治療施設における1500例の実態とその分析、鍼灸臨床レポート、[臨床と経営]プロジェクトチーム研究業績集、医道の日本社、東京、p32～40、1985。
- 2) 西條 一止：わが国における物理療法の実態と展望20、鍼灸療法の特徴(5)、鍼灸柔整などの受療状況と今後の展望、セラピスト、46～50、1987。
- 3) 上山 茂ら：茨城県における鍼灸患者の実態、全日本鍼灸学会誌 37(2):71～76、1987。
- 4) 厚生省統計協会：平成元年度厚生白書、厚生省編、東京、1991。